

金谷 壮太

## ロラン・バルトの記号論的分類活動における「混合」の実践

### 論文概要

本稿では、フランスの批評家ロラン・バルトの記号論的活動を取り上げて、彼が行なった諸々の分析実践を精密に検討することによって、彼の思考のあり方、その一端を明らかにする。よく知られているようにバルトの記号論は、第二次の意味作用（コノテーション）のメカニズムを入れ子構造というかたちで図式化して、この意味作用の働きを明確化したのであるが、本稿では、この理論に基づいたバルトの諸々の分析実践から彼の思考方法の特徴を抽出する。私たちの身の回りに存在する事物から抽象的な概念に至るまで多様な要素を結び合わせるという「混合」の実践は、第二次の意味作用の働きに基づいた分類活動として、バルトの記号論的なテキストに繰り返し現れており、そのなかでもとりわけ『モードの体系』においては、この分析実践が一定の創造性を伴っている。それゆえ、この「混合」の実践を、バルトの思考方法の一特徴として位置づけることができる。

### キーワード

ロラン・バルト、記号論、コノテーション、「混合」の実践、分類活動の創造性

### 1. はじめに

ロラン・バルト（Roland Barthes, 1915-1980）は、1950年代後半から1960年代にかけて記号論（記号学）に傾倒し、様々な事物を研究対象にして意味作用についての探究を行なった。その代表的なものとして、記号論の方法論を整備した「記号学の原理」（1964年）、モード雑誌に掲載された衣服をめぐる意味作用を分析した『モードの体系』（1967年）、および、写真における意味作用のあり方にアプローチした「映像のレトリック」（1964年）を挙げることができる。

バルトが実践した記号論の功績は、意味作用の働きを意味が産出されるプロセスとして浮き彫りにしたこととあり、これは、ソシュールの言語学を背景にしたイェルムスレウの言語理論で素描されていた第二次の意味作用すなわちコノテーション（connotation）のメカニズムを明確化したことによく表われている。この点をはじめとしたバルトの記号論の枠組みは、すでにおおむね整理されているが<sup>1</sup>、バルトによる意味作用の探究に対して検討すべき課題がまだ残されている。

それは、バルトの理論の是非を問うことではなく、理論の構築や実践に見られる

彼の思考のあり方にアプローチすることである。実際バルトの理論には、綿密さが際立った客観性と一定の主観性のもとで快楽を追い求めることが矛盾せずむしろよく調和するという特殊性を感知することができるのであり<sup>2</sup>、この特殊性の有り様を解明するためには、彼の理論装置ではなく彼の思考方法に狙いを定める必要があるだろう。また、理論家バルトの足跡を注視するジャン＝マリー・シェフエールは、バルトのテキストに「思考の体験というステータス (statut d'expériences de pensée)」を見出し、バルトの思考そのものをたどることの重要性を説いたが<sup>3</sup>、この点について彼は、近年刊行されたバルトについてのテキストにおいて、(理論的なプログラムが提示されたテキストを通じて) バルトの思考の歩みを「延長する (prolonger)」と記述している<sup>4</sup>。20 世紀の思想の発展に大きな足跡を残したバルトの「思考の体験」を検討することは、現代において、単なる理論の受容を超えて彼の思考方法を受け継ぎまた活かすことにつながるだろう。

第二次の意味作用についてのバルトの理論は、「記号学の原理」(最終チャプター) および『モードの体系』(3 番目のチャプター) において、第一次の意味作用すなわちデノテーション (dénotation) がそのシニフィアンとなるかたちで組み込まれる入れ子構造として図式化されているが、本稿は、この理論を活用した諸々の分析実践を支える彼の思考方法の一端を明るみに出すことを目的とする。とりわけ『モードの体系』は、精密な議論構成を有した長大な著作であり、全容を把握することが容易なテキストではない<sup>5</sup>。しかし、精密であるからこそ、この著作ではバルトの思考方法が特徴的なかたちで表われているように思われる。

本稿では、バルトの記号論、より細かく言えば意味作用をめぐるバルトの分類活動を通じて観察できる彼の思考方法を、意味作用に関与する諸要素(記号として捉えられる諸々の事物)をグルーピングするという「混合」の実践として提示する。このグルーピングの作業がなぜ注目に値するのか、その理由は、バルトによる「混合」の対象となる諸要素が、必ずしも親近性を持たない、言い換えれば、誰の目から見ても自明というわけではないからである。また、バルトが行なう分類は第二次の意味作用の働きと密接な関係性を有しており、この点の詳細についても本稿で検討したい。

この問題設定は、博士論文「ロラン・バルトにおける提喩的意味作用」<sup>6</sup>のなかの第2章と重なり、そこでは、現実表象の問題が前景化されている神話分析、写真論、文学言語論といった諸々の分析におけるバルトの「混合」の実践を提示した。本稿では、議論の前提としてバルトの神話分析を念頭に置きつつも、神話分析からの洗練ないし発展が見られ、かつ上記の分析実践以外のバルトの記号論的なテキスト、すなわち、上記の分析実践のように現実表象の問題に取り組むことを目的としていない「広告のメッセージ」(1963 年)、「対象の意味論」(1964 年に行なわれた講演)、そして『モードの体系』を取り上げて、バルトによる「混合」の実践が幅広い分析対象に適用されることを示したい。

## 2. 「混合」の実践と第二次の意味作用

バルトの記号論の端緒は、『現代社会の神話』（1957年）に収められた「今日における神話」（1956年）というテキストに見られる。本節では、意味作用の働きを理論化しつつ諸要素を「混合」するバルトの思考方法がこのテキストにおいて素描されていることを確認しつつ、バルトにとって意味作用は多様な対象を分類するための土台として存在していることを示したい。

『現代社会の神話』においてバルトは、もっともらしい見かけを装ったイデオロギーの欺瞞を暴くという神話批判ないしイデオロギー批判を行なったが、「今日における神話」は彼の神話批判の理論的基盤を形成している。「今日における神話」を通じてバルトは、意味作用の働きに貫かれた第二次の記号の体系としての「神話」のメカニズムを明るみに出しつつ、諸要素の「混合」という思考方法を実践する。第二次の記号の体系としての「神話」とは、第二次の意味作用（による言語活動）すなわちコノテーション（による言語活動）のことである。

簡潔にまとめると<sup>7</sup>、バルトの神話分析の要点は、第二次の意味作用の働きを活かして、第一次での様々な意味作用ないし意味実践（デノテーション）のあり方を分類する（的確に位置づける）ことにある。たとえば、フランス軍隊風の敬礼をする黒人兵士の表象（写真というメディアを通じた第一次での意味実践）から、第二次の意味作用のレベルでフランス帝国性（impérialité française）という概念を抽出することができるが、この概念は「フランス性と軍隊性の意図的な混合（mélange intentionnel de francité et de militarité）」<sup>8</sup>から成る。バルトは、フランス性と軍隊性という相異なる二つの要素を結びつけて、それらをひとつの概念のもとに分類しているのである。またバルトは、「神話」という第二次の記号の体系においてあるひとつの概念がどのような性質を有しているのかを説明するにあたって、ある一時期にフランスのプチブルジョワが中国に対して持っていた観念をシナ性（sinité）と名づける際、「特殊な混合（mélange spécial）」<sup>9</sup>という操作によって、鈴、人力車、阿片窟といった雑多な事物をグルーピングしている。いくつかの事物を通じて得られる神話的概念（concept mythique）すなわちシナ性という観念は、第二次の意味作用のレベルに位置する。

このように、バルトが行なう「混合」の操作とは、第一次での意味実践に属する諸々の要素を第二次の意味作用に基づいて分類することにある。ここで注意したいのは、バルトによる分類が必ずしも自明ではないということである。実際、分類されている対象は雑多な要素にほかならず、また、もし完全に自明であればそもそも神話分析をする必要はないだろう。それゆえ、「神話」として具現化される意味作用のあり方を分類すること、すなわち第一次での意味実践から第二次の意味作用へと至る意味作用のプロセスを通じて得られる何らかの概念を名づけるという作業は、分析者（バルト）の個人性を伴うことになる。

そのうえでここでは、バルトがまさに意味作用という現象を、より正確に言え

ば第二次の意味作用の働きを、分類活動のための基準として捉えていたことを強調しておきたい。彼は、記号論（記号学）についての簡潔な解説となっている「意味の調理場」（1964年）というテキストにおいて、衣服、自動車、広告の映像、新聞の見出し等々といった様々な対象を記号と見なしつつ、「重要なのは、見たところ無秩序である膨大な事実に対してある分類原理を施すことができるということであり、そしてまさに意味作用こそがその原理を与えてくれるのである。」<sup>10</sup>と述べている。同時にこのテキストでバルトは、「コノテーションの（レベルで示された）意味（sens connoté）」<sup>11</sup>の存在とともに、「諸々のメッセージの内容ではなくその作られ方（facture）に焦点を合わせる」<sup>12</sup>ことを重要視しているが、デノテーションからコノテーションに至る意味作用のプロセスに注意を払うからこそ、たとえばコノテーションのレベルにおいてフランス帝国性と命名できる概念の組成が、デノテーションのレベルで感知できるフランス性と軍隊性に依拠するという点が明確になる。ゆえに、意味作用をプロセスとして捉えたうえでコノテーションの働きを前景化することは、バルトの分類活動の土台を形成しているのである。

### 3. 分類活動として展開される「混合」の実践

本節では、社会における個別具体的な事象（事物）に対するバルトの記号論的な分析を取り上げて、第二次の意味作用の働きに基づく彼の「混合」の実践を分類活動として捉えることができるという点をより明確にしたい。本節で検討するバルトのテキストは、「今日における神話」の時点とは異なり、彼のなかで記号論の用語が整備された1960年代に発表されており、「コノテーション」という用語が頻繁に用いられているため、第二次の意味作用が問題になっていることが容易にわかる。

「広告のメッセージ」（1963年）においてバルトは、「アストラ [マーガリンの商品名] とともに黄金の料理を（Cuisinez d'or avec Astra）」、および「ジェルヴェのアイスクリームで喜びからとろけてしまう（Une glace Gervais et fondre de plaisir）」という二つの広告文<sup>13</sup>を通じて、広告に備わる意味作用の働きを分析していた。これら二つの広告文の字義通りの意味（デノテーション）によって構成されるコノテーション（第二次の意味作用）、より細かく言えば、コノテーションのレベルでのシニフィアン（デノテーションそれ自体によって構成されるシニフィアン）に対応するシニフィエとして、バルトはそれが「製品の素晴らしさ（excellence du produit）」<sup>14</sup>であると指摘する。また、広告の特徴として、デノテーションの表現によって、あからさまなかたちを取る第二次のメッセージ（「製品の素晴らしさ」）が根拠を伴うものになるという点が挙げられている<sup>15</sup>。

この「製品の素晴らしさ」という第二次のメッセージは、コノテーションのレベルでのシニフィエにはかならないこと、つまりそれがあつたひとつの概念として存在していることに注目したい。優れた広告文とは豊かな表現を「凝縮する（condenser）」<sup>16</sup>ことにあると述べたうえで、バルトは、二つの広告文それぞれから次のような読

み取りを行なっている。

「…」アイスクリームが「喜びからとろけ」させると言うとき、ひとつの経済的な言表のもとで、とろけさせる物質の字義通りの表象（その素晴らしさはとろけるリズムに起因する）と喜びによって自分が無になるという大きな人類学的テーマが結びついている。料理が黄金であると言うとき、それは、計り知れない価値の観念とかりかりする物質の観念とが凝縮されたものである。<sup>17</sup>

相異なる二つの要素（デノテーションの表現およびうれしさによる無化というテーマ）、またさらに、必ずしも親近性を持つとは言えない二つの概念（「計り知れない価値の観念とかりかりする物質の観念（*idée d'un prix inestimable et d'une matière croustillante*）」）が、当該の広告文をめぐって結び合わされており、このバルトの読み取りは「混合」の実践に基づいている。

引用文のなかではコノテーションのレベルでのシニフィエ（「製品の素晴らしさ」）について言及されていないが、実質的には、「製品の素晴らしさ」という概念のもとで、諸々の要素が「混合」というかたちでグルーピングされていると見なせる。というのも、この引用文の直前の箇所、文彩（人をとろけさせるアイスクリーム）や隠喩（黄金としての料理）や言葉遊び（リズム）といったデノテーションのレベルでのレトリック的な表現は、「言語活動を諸々の潜在的なシニフィエの方へと拡大し、ゆえにそれらの記号〔文彩など〕を受け取る人間に全体性の経験が持つ力そのものを与える」<sup>18</sup>と述べられているからである。「製品の素晴らしさ」という概念は、「全体性の経験が持つ力そのもの（*puissance même d'une expérience de totalité*）」を担う「諸々の潜在的なシニフィエ（*signifiés latents*）」のひとつにはかならないだろう。それゆえ、この「混合」というかたちでのグルーピングは、ある何らかの概念のもとに複数の要素を集めるという意味合いで、初歩的ではあるものの分類活動の一環であると言える。

このように、あまり目立たないマイナーなテキストにおいても（実際「広告のメッセージ」はかなり短いテキストである）、第二次の意味作用に対する前景化とともに、分類活動の一環と見なせるかたちで「混合」の実践が見て取れるが、この広告分析と同時期にバルトは、「対象の意味論〔／事物の意味論〕」と題する講演を行なっていた（1964年に行なわれ1966年に出版）。そこでバルトの分析対象となったのは、私たちの身の回りに存在する事物そのものであった。この講演でバルトは、製造されたうえで消費の対象となる諸々の事物を起点にしてコノテーションが生じる点を念頭に置いており、彼は、そうしたコノテーションを「事物の「技術的な」コノテーション（*connotations « technologiques » de l'objet*）」<sup>19</sup>と呼んでいる。

バルトは、たとえば白い電話がその外観からしてデラックスという観念を喚起するといったように、あらゆる事物はその用途（使い道）のほかには何らかの意味を必

ず持っていること、言い換えれば、人間の社会においては完全に無意味なものは存在しないという点を述べたうえで<sup>20</sup>、諸々の事物を考察するにあたり、二つの「座標系 (coordonnée)」について説明している<sup>21</sup>。一つ目は象徴の座標系 (coordonnée symbolique) と呼ばれているもので、これは、たとえばランプが夜を示す（あるいは別の箇所の例では十字架がキリスト教を表わす）というように、シニフィアンとシニフィエとのあいだの（文化的・社会的見地から見て）かなり明白な関係性から成る。本稿で注目したいのは二つ目の座標系、すなわち、「分類の座標系 (coordonnée de classement)」ないし「分類学的座標系 (coordonnée taxinomique)」と呼ばれるものであり、この場合、文字通り分類するという行為が問題になっている。

「分類の座標系」をめぐる論じられるのは、「事物の集まり、事物の組織化された多数性と結びついている意味作用 (significations qui sont attachées à des collections d'objets, à des pluralités organisées d'objets)」<sup>22</sup>である。これは、何らかのグループを形成する諸々の事物によってもたらされる意味作用であり、ゆえにこの意味作用に対する読み取りにおいては、諸々の事物をグルーピングするというバルトの作業が前景化される。

[...] この映像「広告という枠組みのなかでの、夜に新聞を読んでいる男性の映像」のなかには、四つか五つの意味する事物があり、それらが協力して、唯一の包括的な意味、息抜きや休息といった意味を伝えています。ランプがあり、ざっくりとしたウールのセーターの快適さがあり、革の肘掛け椅子があり、新聞があります。[...] <sup>23</sup> (強調原文)

この引用文では、ランプ、ウールのセーター、革の肘掛け椅子、新聞といった多様な事物のまとまりから、息抜き（休息）という「包括的な意味 (sens global)」つまりある明確な概念が導き出されている。諸々の事物はひとつの概念のもとに集められて結合されており、その作業を「混合」の実践と捉えることができる。

諸々の事物は、息抜き（休息）という概念の構成要素として位置づけられる。この引用文の直後の箇所でバルトは、諸事物が集められた状態を、諸々の記号が空間的な広がりを持った状態と見なして連辞 (syntagme) と呼びつつ、諸要素が列挙されている関係性を並列 (parataxe) と呼んでいるが、バルトが行なっていることは、ある明確な概念のもとに意味作用を発揮する諸要素を分類するということである。

また、分類活動としてのこうした「混合」の実践は、コノテーションを通じて行なわれていることがわかる。というのも、分類される諸々の要素に備わる意味作用は「技術的なコノテーション」にほかならないからであるが、この場合、諸々の事物の並列がどのようにコノテーションを発揮するのかという点が明確化されているからである。コノテーションのレベルにおける息抜き（休息）という「包括的な意味」は、総括的な性質を持つ意味（総合的な意味）であり、諸々の事物の存在（デノテ

ション)を起点にして、それらを集めることから生じている。実際バルトは、家具を引き合いに出して、諸々の事物が集まった状態は、ある何らかのスタイル(様式)という最終的意味(sens final)に直結することを見逃しておらず、具体的には、イギリス性(anglicité)を喚起するところの、植民地風の家の日よけ、ある男性の服装、その男性の口ひげ、(航海や馬術に対する好みを示す)船の置物やブロンズの馬といった諸事物が列挙されている<sup>24</sup>。

このようにバルトは、「広告のメッセージ」における場合と同様に、第二次の意味作用を通じて「混合」の実践を行なう。本節で付け加えておきたいのは、次の点である。一方でランプやウールのセーター等々に対するグルーピング、他方で「計り知れない価値の観念」と「かりかりする物質の観念」に対するグルーピング、これらの「混合」においては、諸々の要素は多様性に富んでおり、それらは互いに密接な関連性があるというわけではない。つまり、諸要素が効果的に組み合わせられているのである。

この講演でバルトは、コノテーションの把握が分析者の個人性に依存していることを指摘しており、彼は、本来的に多義的(polysémique)である記号としての事物から得られる(コノテーションの)シニフィエに対しては複数の読み取りが可能であり、分析者が自身の読み取りを選択するということについて言及している<sup>25</sup>。この講演で分析者バルトの個人性は、諸要素を効果的に組み合わせるという点において、ある一定の創造性につながっていると思われる。次節では、この創造性について検討を施すかたちでバルトによる「混合」の実践を示したい。

#### 4.『モードの体系』における「混合」の実践とその創造性

バルトによる「混合」の実践が最も洗練されたかたちで展開されているのは、『モードの体系』でのレトリックの体系に対する分析を通じてである。本節では、分類活動としての「混合」の実践が、諸々の概念を巧みに操作することに基づいた一種の創造性を伴っているということを明らかにする。『モードの体系』でのバルトの微細な分析実践を高く評価するシェフェールは、バルトの思考の歩みを「延長する」例として、この著作における衣服の(様々な変異を前提にした)長い／短いという基本的な対立から、現代の状況に照らし合わせつつ、くるぶしまで垂れ下がるくらいの長さ、ひざしたで止まるくらいの長さ等々、というように、ミニスカートおよびドレス(ワンピース)の長さについて素描している<sup>26</sup>。つまりシェフェールは、長い／短いという基本的な対立を微細なものにすることでバルトの「思考の体験」を活かそうと試みているが、本稿では、『モードの体系』を分析対象にして、「混合」の実践の発展的な様相を浮き彫りにしようと努める。

モード雑誌に記載された衣服に備わる意味作用が探究された『モードの体系』は、出版年こそ1967年であるが、実際の分析は1957年から1963年にかけて行なわれており<sup>27</sup>、『モードの体系』が準備された時期は、「広告のメッセージ」や「対象の意味論」のみならず「今日における神話」にも近い。この著作においてバル

トは、用語体系 (système terminologique) およびレトリックの体系 (système rhétorique) という二つの体系を検討することを通じて (これらの体系は3番目のチャプターで図式化されている)、「モード」つまり絶え間なく意味作用を発揮し続けるモード雑誌の有り様の総合的な体系を構成したのであるが、用語体系はモード雑誌の諸々のデノテーションから成り、レトリックの体系はモード雑誌の諸々のコノテーションから成る<sup>28</sup>。

レトリックの体系に対するバルトの検討は、神話分析において見られたイデオロギー批判の枠組みのもとでなされている (たとえば19番目のチャプターの冒頭で取り上げられているように、モード雑誌は合理性を巧みに操って自らの言表にもっともらしさを付与する)。このレトリックの体系に対する分析において「混合」の実践は、比較的長いモード雑誌の文章を例にして行なわれている (実際にはそうした類の言表があるという仮定のもとに分析が進められている)。その言表は、次のようなものである。「[...] 彼女は勉強とサプライズ・パーティーとパスカルとモーツァルトとクール・ジャズが好きです。彼女はローヒールの靴をはき、小さなスカーフを集め、おにいさんのさっぱりとしたセーターと、ふっくらしてきぬずれの音がするペチコートが大好きなのです」<sup>29</sup>。

この言表においてバルトが注視するのは、「小さな (petit)」、「おにいさんの (du grand frère)」、「きぬずれの音がする (froufrouant)」といった諸々の形容 (第一のグループ)、「彼女は勉強とサプライズ・パーティーとパスカルとモーツァルトとクール・ジャズが好きです (elle aime les études et les surprise-parties, Pascal, Mozart et le cool-jazz)」という表現 (第二のグループ)、「好きです (aimer)」、「はき (porter)」、「集め (collectionner)」、「大好きなのです (adorer)」という動詞の列挙 (第三のグループ) である。これらの例は、レトリックの体系 (コノテーション) のレベルでシニフィアンとして機能する。それに対応するコノテーションのレベルでの潜在的かつ総括的なシニフィエは、モード雑誌が体现する世界観 (漠然としているがバルトはヴィジョン (vision) という呼び方をしている<sup>30</sup>)、あるいはまた、モード雑誌による現実世界の表象のスタイルであるとされている (16.2: 『モードの体系』のセクション番号、以下同様)。モード雑誌が構築する世界観は、雑誌を通じてその読者によって共有される「[「モード」のイデオロギー (idéologie de Mode)]」<sup>31</sup>であり、実際のところこの世界観は、ある種の幸福さと名づけることができる (当該の箇所ではバルトはそうのように名づけていないが、後述する別の箇所では幸福 (bonheur) と名づけられている)。

コノテーションのレベルでの諸々のシニフィアンの働きについて確認しよう (16.4)。第一のグループはそれぞれの語彙単位ごとに機能する。たとえば、デノテーションとしては大きさを示すにすぎない「小さな」という語は、コノテーションとして、高価でないという経済性やシンプルであるという審美性などのような、モード雑誌の世界観を支える諸々の性質を喚起する。同様に、デノテーションのレベル

では男性性を示す「おにいさんの」という語彙は、コノテーションのレベルでは親しみやすさ（家庭的な感じがすること、子供っぽさ）を表わし、事物がこすれる音をデノテーションのレベルで示す「きぬずれの音がする」という語彙は、コノテーションのレベルではごくごく軽い（ほんのわずかな）エロティシズムを表わす。他方、第二のグループと第三のグループは、複数の語彙単位にまたがって効果を発揮する前節で見た並列 (parataxe) という言語表現上の技巧によって構成されている。論理的根拠ぬきで列挙された様々な要素（「勉強」、「サプライズ・パーティー」、「パスカル」、「モーツァルト」など、あるいはまた、「好きです」、「はき」、「集め」などといった表現）からは、第一のグループと同様に、モード雑誌の世界観を形成する特徴的な性質、すなわち、描写されている人物の趣味の多彩さやそこから導かれるその人物の個性の豊かさを感知することができる。

第二次の意味作用の働きが語彙単位ごとなのかそうでないのかという違いを伴って、これらの例では、コノテーションのレベルでのシニフィエすなわち幸福さという概念のもとで、雑多な諸々の要素が結合されている。この場合、「混合」の対象となっている諸々の要素が多様性に富んでいるために、この操作の特異性が際立っていると言える。さらにそればかりでなく、コノテーションのレベルにおける諸々の概念が重層的と呼ぶべき構造を形成していることがわかる。経済性、審美性、親しみやすさ、エロティシズム、描写されている人物の趣味の多彩さ、その人物の個性の豊かさといった諸々の概念はすべて、幸福さという概念に属している。別の言い方をすれば、幸福さという概念が親しみやすさ等々の概念を包含している。さらに細かく見ればそのなかでも、経済性、審美性、親しみやすさ、エロティシズム、描写されている人物の趣味の多彩さは、その人物の個性の豊かさに属すると考えられる。ここでは、重層的な構造を成す概念的な関係性に根ざしたかたちで、親しみやすさとエロティシズム、あるいは経済性と趣味の多彩さのように、必ずしも親近的とは言えない諸概念を含めて「混合」の操作が行なわれているのである。このことは、次のように言い換えることができるだろう。つまりバルトは、幸福さと呼べるモード雑誌の世界観のもとで（あるいはそうしたモード雑誌の世界観に適合するように）必ずしも親近的とは言えない諸概念を組み合わせている。またそれと同時にバルトは、モード雑誌の包括的な世界観を何らかの「ヴィジョン」ないし「幸福」と命名しているのである。

以上のようなバルトの操作をまとめると、彼は、誰の目にも自明なデノテーションから、コノテーションのレベルでいくつもの概念を導き出し、その結びつきが必ずしも自明ではないそれらの概念を巧みに組み合わせつつ、それらの概念を包括することのできる特定の概念に名称を与えるのである。必ずしも親近的な関係にはない諸要素を組み合わせる、かつそれらの要素をまとめることができる概念を命名するという（その概念自体が総括的である以上、それに与えられる名前が漠然としているのも無理はない）、これら二つの点から、バルトによるこの「混合」

の実践は一定の創造性を有すると言えるだろう。

「レトリックのシニフィエの「あいまいさ [／星雲状態]」(« Nébulosité » du signifié rhétorique)」と題されたセクションにおいても(16.6)、バルトによる創造的な「混合」の実践を見て取ることができる。モード雑誌のなかでしばしば見られる相反する要素の共存が、諸説混合主義的かつ幸福感に満たされた世界観(vision à la fois synchrétique et euphorique du monde)に関連していることを検討しつつ、バルトは次のように述べている。

ところで、このレトリックのシニフィエ「諸説混合主義的かつ幸福感に満たされた世界観」は、多数の言表(控えめな大胆さ、飾り気のないファンタジー、屈託のない厳格さ、パスカルとクール・ジャズ、等々)にとって同じである。ということはつまり、多くのシニフィアンに対してレトリックのシニフィエはごくわずかにしか存在していない。そして、これら少数のシニフィエのそれぞれは、いわば、もっと巨大なイデオロギーに浸透された状況に置かれているひとつひとつのイデオロギーなのである(幸福感や諸説混合主義は必然的に、自然、幸福、悪といった一般的な観念を指す)。<sup>32</sup> […](強調原文)

すでに見た「パスカルとクール・ジャズ」をはじめとして、「控えめな大胆さ(audace discrète)」や「飾り気のないファンタジー(fantaisie sobre)」などといった多様なデノテーションは、諸説混合主義的かつ幸福感に満たされた世界観(コノテーションのシニフィエ)のもとでグルーピングされており、バルトによる「混合」の実践が非常に柔軟であることがわかる<sup>33</sup>。また、諸々の概念によって形成される重層的な構造が存在しており、「幸福感(euphorie)」や「諸説混合主義(synchrétisme)」といった概念は、より抽象度(一般性)の高い「自然(nature)」や「幸福(bonheur)」や「悪(mal)」といった概念に組み込まれる。そのなかでも「幸福」という概念は、モード雑誌の総合的な世界観と呼べる観念である。

このように、バルトによる「混合」の実践は、柔軟性に富みながらも多層的な概念構造に裏づけられており、たとえば「控えめな大胆さ」は、「幸福感」に属すると同時に、さらに一般性の高い「幸福」という概念(いわば「幸福感」の集まり)にも属している。

この引用文に続けてバルトは、「幸福」のような最も一般性の高い部類の概念を、星雲(nébuleuse)にたとえられるような、輪郭がはっきりしない概念として捉えている。つまりここでも、分類活動として実践されているバルトによる「混合」の操作が一定の創造性を有していることがわかる。なぜなら、複数の概念レベルにまたがる多様な要素を的確に組み合わせつつ(一方で「パスカルとクール・ジャズ」や「控えめな大胆さ」や「飾り気のないファンタジー」等々の組み合わせ、他方で「幸福感」および「諸説混合主義」の組み合わせ)、またさらに、輪郭がはっきりしな

い概念を命名しなければならないからである。

「『モード』のイデオロギー」を体现する不明瞭な概念に対する命名の作業は、決して自明なものではない。コノテーションのレベルでの潜在的な(latent)シニフィエは、雑誌の読者によって解説されないが伝達されるという逆説的なステータスを有しており(16.5)、分析者によって名づけられなければ、イデオロギーの有り様を的確に把握することはできない。まさにこの点についてバルトは、『モードの体系』の結論において(20.13)、分析者のメタ言語の性質という観点から考察を加えていた。潜在的なシニフィエに対する命名の作業を分析者の役割として規定しつつ彼は、分析者のメタ言語がほかの人間による分析対象(対象言語)にならざるを得ないことを強調したのである。

こうした展望を伴ったかたちで、『モードの体系』でのレトリックの体系に対するバルトの分析においては、「混合」の操作が重層的な概念構造に基づいたかたちでの創造的な分類活動として実践されているのであり、この点は、バルトの記号論的分析実践のひとつの到達点を示していると言えるだろう。

## 5. 結論

本稿では、第二次の意味作用の働きを原動力とするバルトの記号論的分類活動において「混合」と呼ぶことができる分析実践を提示し、その具体的な様相を浮き彫りにした。「混合」の実践は、バルトの記号論的なテキストにおいて、代表的なものから比較的目立たないものまで含めて繰り返し見られた(本稿の冒頭で述べたように「混合」の実践は、現実表象の問題が前景化されている彼の写真論や文学言語論にも見られる)。彼の記号論の端緒である「今日における神話」や広告文に対する簡潔な分析が行なわれた「広告のメッセージ」においては、「混合」の操作は初歩的な段階にとどまっていたが、「対象の意味論」においては、私たちの身の回りに存在する決して特異ではない様々な事物が第二次の意味作用を発揮するメカニズムが明確化されつつ、「混合」の実践が行なわれていた。そして、『モードの体系』における「混合」の操作は、重層的な概念構造に支えられたかたちでの創造的な分類活動として捉えることができた<sup>34</sup>。したがって、写真論や文学言語論のように現実表象の問題への取り組みを目的としていない諸々のテキストにも共通するこうした「混合」の実践を、バルトの思考方法の一特徴と見なすことができる。

本稿で取り上げた諸々のテキストを通じて常に問題になっていたのは、バルトが第二次の意味作用に基づいて諸々の概念を提示するということにほかならないが、とりわけ『モードの体系』を通じて明らかになったのは、彼が、親近性を持たない諸概念を組み合わせるとともに、それらの概念をグルーピングできる茫漠とした状態、言い換えればそれらの概念を包括できるほど抽象度の高い概念を名づけるという知的操作を行っていたことである。バルトは、第二次の意味作用が概念レベルの移行に関連していることを把握していたのみならず、第二次の意味作用の働きを活かした細かい概念操作を行っていたのである。ゆえに、バルトのキャリア

全体を射程に入れて、(第二次の) 意味作用の探究ないし応用としての、創造的と形容できるほどの彼の概念操作の詳細を明るみに出すことを今後の課題としたい。

## 注

- 1 数多くのバルト論のなかでもとりわけ大浦康介による「フランス構造主義」の解説は、バルトの活動を主要な対象とするかたちで記述されており、記号論を含むバルトの構造主義的な活動の要点が的確に示されている(大浦康介「フランス構造主義」、小森陽一ほか編『岩波講座文学別巻 文学理論』、岩波書店、2004年、41-71頁)。また、記号論に傾倒していた時期のバルトの活動の全体像については、篠田浩一郎の浩瀚なバルト論の第2部が詳しい(篠田浩一郎『ロラン・バルト——世界の解説』、岩波書店、1989年、117-233頁)。
- 2 Cf. Marc Buffat, « L'aventure sémiologique », *Revue des sciences humaines*, no. 268, 2002, pp. 37-39.
- 3 Cf. Jean-Marie Schaeffer, « Roland Barthes : de la théorie à la pensée », in *UTCP [The University of Tokyo, Center for Philosophy] Bulletin*, vol. 2, 2004, pp. 20-21.
- 4 Cf. Jean-Marie Schaeffer, *Lettre à Roland Barthes*, Thierry Marchaisse, 2015, p. 84.
- 5 先行のバルト論において『モードの体系』は、「風変わりなバロック的作品 (étrange œuvre baroque)」(Éric Marty, *Roland Barthes. Le Métier d'écrire*, Seuil, 2006, p. 134) や「諸々の記号の夢幻状態 (onirisme des signes)」(Marie Gil, *Roland Barthes. Au lieu de la vie*, Flammarion, 2012, p. 306) と形容されている。
- 6 金谷壮太「ロラン・バルトにおける提喩的意味作用」、筑波大学大学院人文社会科学部研究科、2016年12月。
- 7 「混合」の実践としてのバルトの神話分析の詳細については、前掲博士論文「ロラン・バルトにおける提喩的意味作用」の第2章第2節を参照のこと。
- 8 Roland Barthes, *Mythologies* [suivi de Le Mythe, aujourd'hui] (1957), in *Œuvres complètes*, t. I (1942-1961), nouvelle édition revue, corrigée et présentée par Éric Marty, Seuil, 2002, p. 830 (ロラン・バルト『ロラン・バルト著作集3 現代社会の神話 1957』、下澤和義訳、みすず書房、2005年、329頁)。
- 9 Barthes, *Mythologies*, p. 834. 邦訳334頁。
- 10 Roland Barthes, « La cuisine du sens » (1964), in *Œuvres complètes*, t. II (1962-1967), nouvelle édition revue, corrigée et présentée par Éric Marty,

- Seuil, 2002, p. 589 (ロラン・バルト「意味の調理場」、『記号学の冒険』、花輪光訳、みすず書房、新装版 1999 年、47 頁)。
- 11 Barthes, « La cuisine du sens », p. 590. 邦訳 49 頁。
  - 12 Barthes, « La cuisine du sens », p. 590. 邦訳 48 頁。
  - 13 Cf. Roland Barthes, « Le message publicitaire » (1963), in *Œuvres complètes*, t. II (1962-1967), nouvelle édition revue, corrigée et présentée par Éric Marty, Seuil, 2002, p. 243 (ロラン・バルト「広告のメッセージ」、『記号学の冒険』、花輪光訳、みすず書房、新装版 1999 年、70 頁)。
  - 14 Barthes, « Le message publicitaire », p. 244. 邦訳 71 頁。
  - 15 Cf. Barthes, « Le message publicitaire », pp. 245-246. 邦訳 73-75 頁。
  - 16 Barthes, « Le message publicitaire », p. 246. 邦訳 75 頁。
  - 17 Barthes, « Le message publicitaire », pp. 246-247. 邦訳 76 頁。
  - 18 Barthes, « Le message publicitaire », p. 246. 邦訳 75 頁。
  - 19 Roland Barthes, « Sémantique de l'objet » (1966), in *Œuvres complètes*, t. II (1962-1967), nouvelle édition revue, corrigée et présentée par Éric Marty, Seuil, 2002, p. 819 (ロラン・バルト「対象の意味論」、『記号学の冒険』、花輪光訳、みすず書房、新装版 1999 年、81 頁)。
  - 20 Cf. Barthes, « Sémantique de l'objet », pp. 819-821. 邦訳 82-85 頁。
  - 21 Cf. Barthes, « Sémantique de l'objet », p. 821. 邦訳 85-86 頁。
  - 22 Barthes, « Sémantique de l'objet », p. 823. 邦訳 90 頁。
  - 23 Barthes, « Sémantique de l'objet », p. 824. 邦訳 90-91 頁。
  - 24 Cf. Barthes, « Sémantique de l'objet », p. 824. 邦訳 91-92 頁。
  - 25 Cf. Barthes, « Sémantique de l'objet », p. 825. 邦訳 92-93 頁。
  - 26 Cf. Schaeffer, *Lettre à Roland Barthes, op. cit.*, pp. 87-92.
  - 27 Cf. Roland Barthes, *Système de la Mode* (1967), in *Œuvres complètes*, t. II (1962-1967), nouvelle édition revue, corrigée et présentée par Éric Marty, Seuil, 2002, p. 897 (ロラン・バルト『モードの体系』、佐藤信夫訳、みすず書房、1972 年、5 頁)。『モードの体系』の刊行が遅れた理由として、「記号学の原理」の準備や論争のために急遽書かれた『批評と真実』(1966 年)の刊行を挙げることができる。Cf. 石川美子『ロラン・バルト——言語を愛し恐れつづけた批評家』、中央公論新社(中公新書 2339)、2015 年、74 頁。
  - 28 レトリックの体系に対するバルトの分析における創造性(本稿で提示しようとする創造性)とは別に、用語体系に対するバルトの分析においては、体系のあり方を変えるというかたちで創造性が発揮されている。この点については、前掲博士論文「ロラン・バルトにおける提喩的意味作用」の第 3 章を参照のこと。
  - 29 Barthes, *Système de la Mode*, p. 1124. 邦訳 313 頁。
  - 30 正確には、「衣服について雑誌が自らに与えかつ読者に与えるヴィジョ

ン (vision que le journal se donne et donne du vêtement)」や「衣服を着ている女性の心理学的なタイプについて雑誌が自らに与えかつ読者に与えようとするヴィジョン (vision que le journal se donne et veut donner du type psychologique de la porteuse de vêtement)」と記述されている。Cf. Barthes, *Système de la Mode*, pp. 1124-1125. 邦訳 313 頁。

- 31 Barthes, *Système de la Mode*, p. 1128. 邦訳 318 頁。
- 32 Barthes, *Système de la Mode*, p. 1130. 邦訳 321 頁。
- 33 ここで検討したいのは、「パスカルとクール・ジャズ」や「控えめな大胆さ」などの表現が結び合わされていることであるが、これらの表現それ自体が相反する要素 (ないし少なくとも親近性を持っていない要素) から成り立っている。
- 34 モード雑誌 (に記載された衣服) の意味作用をめぐる創造性は、無論バルトの作業に全面的に依存しているのではない。モード雑誌におけるコノテーションのシニフィエ (レトリックの体系のシニフィエ) は、先に述べたとおり潜在的であり、バルトによる読み取り以前に雑誌に胚胎している。しかしこの潜在的なシニフィエは、分析者の知識 (語彙体系) に応じたかたちで命名されてはじめて顕在化される。つまり、シニフィエの顕在化の仕方ないし様態 (より一般的に言えば意味の読み取り方) が分析者の個人性に基づいているのだと言える。

## 主要参考文献一覧

- BARTHES Roland, *Mythologies* [suivi de Le Mythe, aujourd'hui] (1957), in *Œuvres complètes*, t. I (1942-1961), nouvelle édition revue, corrigée et présentée par Éric Marty, Seuil, 2002 (バルト、ロラン『ロラン・バルト著作集 3 現代社会の神話 1957』、下澤和義訳、みすず書房、2005 年) .
- 一, « Le message publicitaire » (1963), in *Œuvres complètes*, t. II (1962-1967), nouvelle édition revue, corrigée et présentée par Éric Marty, Seuil, 2002 (バルト、ロラン「広告のメッセージ」、『記号学の冒険』、花輪光訳、みすず書房、新装版 1999 年) .
  - 一, « La cuisine du sens » (1964), in *Œuvres complètes*, t. II (1962-1967), nouvelle édition revue, corrigée et présentée par Éric Marty, Seuil, 2002 (バルト、ロラン「意味の調理場」、『記号学の冒険』、花輪光訳、みすず書房、新装版 1999 年) .
  - 一, « Éléments de sémiologie » (1965 [1964]), in *Œuvres complètes*, t. II (1962-1967), nouvelle édition revue, corrigée et présentée par Éric Marty, Seuil, 2002 (バルト、ロラン「記号学の原理」、沢村昂一訳、『零度のエクリチュール

- ル 付・記号学の原理』、渡辺淳・沢村昂一訳、みすず書房、1971年）。
- , « Sémantique de l'objet » (1966), in *Œuvres complètes*, t. II (1962-1967), nouvelle édition revue, corrigée et présentée par Éric Marty, Seuil, 2002 (バルト、ロラン「対象の意味論」、『記号学の冒険』、花輪光訳、みすず書房、新装版 1999 年)。
- , *Système de la Mode* (1967), in *Œuvres complètes*, t. II (1962-1967), nouvelle édition revue, corrigée et présentée par Éric Marty, Seuil, 2002 (バルト、ロラン『モードの体系』、佐藤信夫訳、みすず書房、1972 年)。
- BUFFAT Marc, « L'aventure sémiologique », *Revue des sciences humaines*, no. 268, 2002, pp. 27-39.
- GIL Marie, *Roland Barthes. Au lieu de la vie*, Flammarion, 2012.
- HJELMSLEV Louis, *Prolégomènes à une théorie du langage*, Minuit, 1968 (1943) (イエルムスレウ、ルイ『言語理論の確立をめぐる』、竹内孝次訳、岩波書店、1985 年)。
- MARTY Éric, *Roland Barthes. Le Métier d'écrire*, Seuil, 2006.
- SCHAEFFER Jean-Marie, « Roland Barthes : de la théorie à la pensée », *UTCP [The University of Tokyo, Center for Philosophy] Bulletin*, vol. 2, 2004, pp. 14-22.
- , *Lettre à Roland Barthes*, Thierry Marchaisse, 2015.
- 石川美子『ロラン・バルト——言語を愛し恐れつづけた批評家』、中央公論新社（中公新書 2339）、2015 年。
- 大浦康介「フランス構造主義」、小森陽一ほか編『岩波講座文学別巻 文学理論』、岩波書店、2004 年、41-71 頁。
- 金谷壮太「ロラン・バルトにおける提喩的意味作用」、筑波大学大学院人文社会科学部研究科、2016 年 12 月。
- 篠田浩一郎『ロラン・バルト——世界の解説』、岩波書店、1989 年。